

中司 六呂瀬山古墳とその陪塚

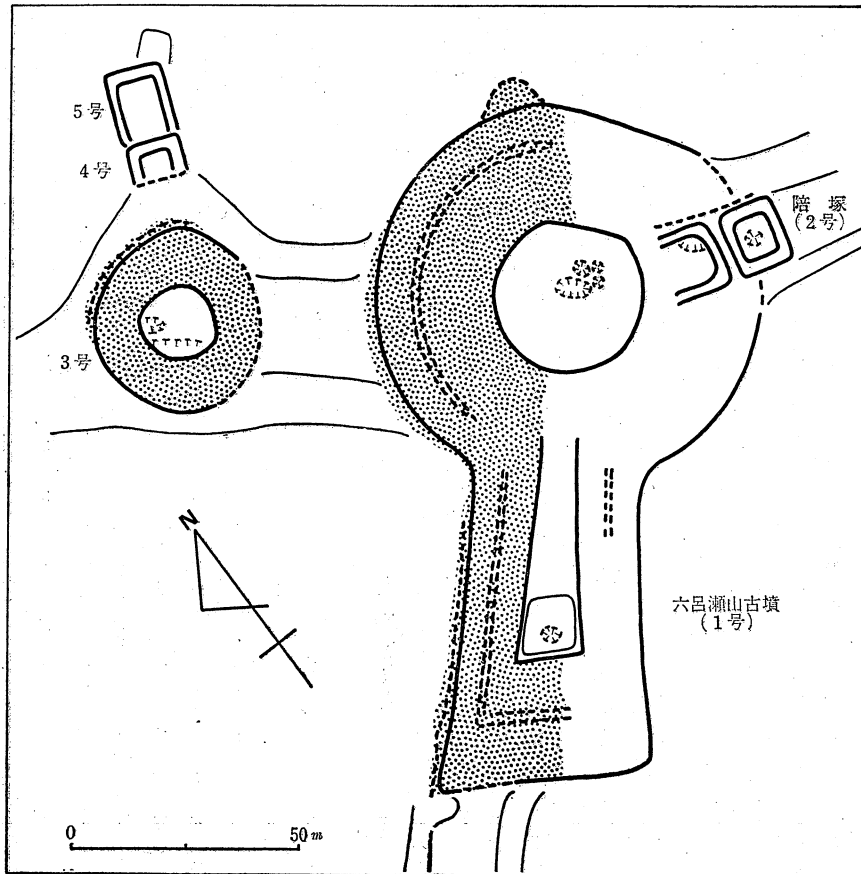
と考えられるからである。

今ここに六呂瀬山古墳及び陪塚の踏査報告を行って、資料のより一層の充実化をはかり、また若干の私見を述べてみたい。

II

九頭龍川右岸、上久米田より野中山王を経て山崎三ヶに至る標高二百メートル以下の山地には多くの古墳が存在している。最近のゴルフ場造成に伴う分布調査においても八十九基あまりの古墳が確認された。これに久米田古墳群などを加えると、その総数は百三基あまりとなる。これらの古墳は九頭龍川右岸の自然堤防帯を基盤としたものと考えられ、今、この古墳群を丸岡古墳群と仮称しておく。当古墳群は対岸の広義の松岡古墳群と対照的な存在であり、平野に最も突出した山王山には原目山同様の墳墓群も認められる。また沖積地に立地した御野山からは舟形石棺も出土している。

今回報告する六呂瀬山古墳群は、丸岡古墳群内の東端部の最も高所に存在する。六呂瀬山は六呂瀬部落の背後にあり、急峻な



第2図 六呂瀬山古墳群分布見取図 (ドットはフキ石)

斜面をなす標高百九十七メートルの山である。その山上からは坂井平野のみならず日本海まで遠望でき、河を挟んでほぼ真南に全長百二十八メートル、県内屈指の規模を持つ手繰城山古墳（松岡三号墳）を臨む。

踏査の結果、山頂に南西に向く前方後円墳一基、それに接して東側に方墳一基、西にやや離れて大形の円墳一基、方墳二基の計五基の古墳を確認した。これらを順次一と五号墳と名づけ、その分布状況を示した見取図が第二図である。

六呂瀬山上の古墳については、既に上田三平氏により「六呂瀬山古墳」として報告されており、また鳴鹿村誌にも触れられているとともに、埴輪の出土する事が附近の人々の間にも伝わっている。上田氏はこの古墳の種々な特徴に着目しながらも、城塞が存在したとの伝説から正確な把握を誤ってしまっている。しかし、調査年代や墳丘規模の大きい点から観ると仕方ない事であろう。報文中に埴輪の出土する事が記載されており、上田氏による命名を生かし、また認識番号名による不明確さを避ける意

味からも、前方後円墳（一号墳）を六呂瀬山古墳、方墳（二号墳）を同陪塚と呼称し、この二基を中心に報告する。

III

六呂瀬山古墳の略測値は次のとおりである。

墳丘主軸長	約百四十七メートル
後円部径	約八十五メートル
同頂部径	約三十三メートル
同高	約十四メートル
くびれ部幅	約三十九メートル
前方部長	約六十二メートル
同幅	約四十五メートル
同高	約十二メートル

従来の測定値は、前方部裾に平坦面が見られず、急勾配で下降する地形による誤認であり、北陸地方最大のものとなる。

墳形については、後円部後方が直線的であり、かつ、山林の繁茂している事から正確は期し難く、前方後方墳の疑いもないではない。しかし、この古墳の視覚的な正面となっている西側面において、円形を呈し

ている。よって、前方後円墳と考えた方が妥当なようである。

後円部後方の裾部には平坦面が造られ、その最大幅は約七メートルあり、東側面ではそのまま張り出しと思われる方形区画に続いていく。この方形区画の上端幅は、東西約十メートル、南北約十一メートルである。後円部は二段築成であり、墳頂部は乱掘されており、ごく最近の跡も見られた。

前方部もやはり二段築成であり、平坦に伸びて先端部で心もち高くなっている。この部分にも盗掘跡が見受けられた。墳丘は自然地形を最大限に利用して築成した為、前方部先端の裾線は墳丘主軸に斜交し、右前方隅は鋭角をなしている。地表観察では前面の平坦地との間に若干のえぐりが見られるのみで、整良な堀割りは造っていないようである。さらに、中央部より左前方にかけては段築間の平坦面があるのみで、前述の如く裾部には存在しない。両部分とも墳丘の平野側斜面には、径二十五センチ前後の河原石が葺石として使用されており、埴輪片も両方から採集している。

中司 六呂瀬山古墳とその陪塚

以上の如く、六呂瀬山古墳は側面観を最も強調する形で地形を利用しており、全長は百五十メートル程度になるのであろうか。両部分の比高差は二メートルであるが、絶対高においては約三メートル後円部が高い。これは計測値の正確を期し難い事と、墳丘裾線が傾斜して造られている事によるものと考えられる。

陪塚は方形の張り出しより掘割りでもって画され、大きさは東西約十二メートル、南北約十五メートル、高さ約二メートルで、これまた盗掘されている。

この古墳は平野側からでは六呂瀬山古墳の陰となり、また、接して造られており陪塚であろう。越前において、他に陪塚と考えられる多くの古墳が同様な従的位置で築かれていた事や、この二基のみ他の古墳から孤立している点から考えても問題はあまい。

遺物は六呂瀬山古墳から埴輪片を採集したが、円筒と形象の両方を含んでいる。その他、附近の人に所蔵されており、さらに福井市立郷土博物館蔵の埴輪鶏頭部も当古

墳のものと考えられる。

三ノ五号墳については今回は省略するが、三号はやや大きく、裾部に平坦面と斜面に葦石が見られた。背面になる東側は掘割りが全く造られていない。

IV

以上が六呂瀬山古墳の概略である。前方部がさほど広がらぬにもかかわらず、両部分の比高差は小さく、形象埴輪を伴い、かつ葦石に河原石のみを使用し、配石も手繰城山古墳の如く背面まで及んでいない。これらの点から、その築造時期は手繰城山古墳より若干後出のもので、五世紀へ入るものであろう。

越前における前半期の古墳は基本的には丘陵先端より順次築造するという選地方法を踏襲しており、標高の高低や視界の良否は即築造順序を反映していない。松岡の丘陵における選地方法も同様であり、手繰城山古墳の時期を四世紀末と五世紀初頭とする比定は、かなり妥当性を持つものと考え

られる。よって六呂瀬山古墳の時期もこう推定しておきたい。

それでは六呂瀬山古墳の被葬者はいかなる性格を有するものであろうか。

既に述べた如く、この古墳は丸岡古墳群に属しており、当古墳の被葬者も、基本的には九頭龍川右岸の自然堤防帯地域を統治した首長であると考えられる。しかし、今、丸岡古墳群を詳細に見るならば、他に全長約五十五メートルと全長四十四メートルの二基の前方後円墳と、舟形石棺を出土し前方後円墳かと考えられる御野山古墳が存在するのみである。それ以外は、張り出しを持つと思われる円墳を含め、直径二十〜三十メートル級の中形円墳八基があるが、おおむね小古墳である。ここにおいて、六呂瀬山古墳を継承すると考えられる大形古墳は見出し得ないのである。その点、丸岡古墳群内でも異例の存在と言えるであろう。

ここで再度対岸の手繰城山古墳と比較するならば、この二つの古墳が多くの類似点を持っている事がわかる。両者ともに九頭

龍川が福井平野に流れる出る地点を扼する平面的位置を占め、標高百数十メートルの山上にある。そして、全長は百メートルを大きく凌駕し、その規模において傑出している。また、時期的にも近接したものと考えられ、段築・葦石・埴輪・方形の張り出し・陪塚を持っている。

このように多くの共通点を有する事は、両墳の被葬者が似かよった性格を保持していた事に由来していると考えられる。そこで手繰城山古墳がいかなる位置を占めているのか調べてみよう。その場合、手繰城山古墳及びこの古墳が属する松岡古墳群については種々調査がなされているが、その位置をより明確にする為、過去の調査を参考にしつつ目を広義の福井平野に広げてみたい。

福井平野周辺には次のような主要な古墳群が分布している。

横山古墳群（竹田川流域―総数約二百三十基、うち前方後円墳十四基）

丸岡古墳群（九頭龍川右岸地域―総数百三基余、前方後円墳三ないし四基）

中司 六呂瀬山古墳とその陪塚

松岡古墳群（九頭龍川左岸地域―総数百六基余、前方後円墳十二基）

酒生古墳（足羽川右岸地域―総数百九十二基余、前方後円墳五基）

御草山古墳群（足羽川左岸地域―総数百二十五基余、前方後円墳・前方後方墳五基）

この他に平野中央部に足羽山古墳群（八幡山・兔越山を含め総数九十九基余、前方後円墳一基）さらに平野南端部にもまとまり（鼓山古墳・銚ヶ崎古墳群・安保山古墳群など）が認められる。以上の如く各古墳群が大河川流域に分布している。これらその統治圏をほぼ知る事のできる地域集団の首長墓は、ほぼ全長三十～五十メートル級の前方後円墳であり、一群内における数は表記の如く五群中三群が三～五基である。しかしながら、横山古墳群及び御草山古墳群は後半期のもを含んでおり、前半期のみに限ってみればそれぞれ三基である。ここにおいて、一単位の地域集団首長墓の平均像を「全長三十～五十メートルの前方後円墳で、古墳時代前半期において三～四基造られている」と求める事ができる。

ところが、今問題となる松岡古墳群には十二基という多くの前半期前方後円墳が造られている。この中には手繰城山古墳をはじめとして、泰遠寺山古墳（全長約百メートル、五世紀中葉）・二本松山古墳（全長約七十六メートル、五世紀末）など数基の大形前方後円墳がみられ、先の平均的な姿からも程遠いものである。さらに、単に墳丘規模の大小のみでなく、外部施設・埋葬施設・副葬品などにおいても他の前方後円墳との間に著しい懸隔を感じさせるグループである。

古墳築造が首長権力の直接的表象であるならば、これら一連の大形前方後円墳の特性は各地域集団の首長より隔絶した優位性を保持していた事に根ざしていると言えるし、同一集団内においてもより上級の階層性を伺わせるに充分である。この優位性こそ、これら大形前方後円墳の被葬者層が、基本的には松岡古墳群に示される地域集団に属しながらも、より広域の複数の地域集団を統合した首長層である事の現われであると考えられる。さらに、差異をもつグル

中司 六呂瀬山古墳とその陪塚

「P」の存在は、当該地域集団内における首長層のヒエラルキーの形成を想定させるものである。

約言するならば、手繰城山古墳のもつ意義もまさにこの点にかかってくるのではないかと考えられるのである。そして、この事がとりもおさず、丸岡古墳群内に異例の大形前方後円墳を出現させた契機であり、石棺分布圏の拡張もかかる状況の反映の一端ととらえられる。

今、このように、複数の地域集団^(注十四)の統合を達成した首長が手繰城山古墳の被葬者であり、その首長層は松岡の地域集団内より輩出したが、ある一時期のみ丸岡の地域集団より折出された。その首長の墳墓こそ六呂瀬山古墳ではないかという予測的見解をもって稿を終えたい。

なお前述の如く、第二図は単なる見取図に過ぎず、計測値もメジャーによるものである。また計測には筑地文博・高嶋敬治郎ならびに石川県文化財保護課の湯尻修平・梶幸夫の諸兄の協力を得た。

(一九七五・六・二二)

(注)

- 一、福井大学考古学研究会・福井考古学研究会などにみられる。
- 二、昨春秋調査された銭瓶古墳群はこの一支群である。
- 三、原目遺跡、重立山古墳群、松岡古墳群を総称したものである。
- 四、福井考古学研究会「原目遺跡」福井考古学研究会 一九七一
- 五、斉藤優「足羽山の古墳」福井県郷土誌懇談会 一九六〇
- 六、福井大学考古学研究会「松岡三号墳(手繰城山古墳)の調査」松岡町教育委員会 一九七五
- 七、上田三平「六呂瀬山古墳」『越前及若狭地方の史蹟』三秀舎 一九三三
- 八、当古墳にも「手繰り」伝説がある事が述べられている。
- 九、何号墳を指すのか明確でない感があるが、報文は一号墳のみに触れているようである。注七に同じ
- 十、注六に同じ
- 十一、凝灰岩の破片が見られたが、あるいはは棺材であろうか。
- 十二、既報告のものでも鼓山古墳・二本松山古墳・手繰城山古墳などに認められる。
- 十三、注七文献に記載されている。他の四基からは埴輪は確認できなかった。
- 十四、注六に同じ
- 十五、山本氏指摘の立地の悪さ(?)は、むしろ別な要因によるものと考えられる。山本昭治「手繰城山古墳について」若越郷土研究一九の二 一九七四
- 十六、平面的規模においては六呂瀬山古墳が優っているが、立面的には手繰城山古墳(後円部高十九・七メートル、前方部高十五・二メートル)の方が高い。立面的な側面観を強調しており、この点からも若干の年代差が伺える。
- 十七、斉藤優「松岡古墳群」『福井県文化財調査報告第八集』福井県教育委員会 一九五八 福井大学考古学研究会「松岡町古墳分布調査報告書」松岡町教育委員会 一九七二
- 十八、永平寺町内に存在するものについては南洋一郎氏より教示を得た。
- 十九、福井大学考古学研究会「福井市酒生地域における埋蔵文化財分希調査報告」一九七四 二十一基追加。
- 二十、うち後半期の二基については大方の承

認を得ていない。一九七四年踏査分。

二十一、注十七文献に同じ。

二十二、墳丘背面を「手抜き工事」した例であり、後円部と陪塚の測図では円墳説の根拠となり得ない。注十五文献に同じ

二十三、各地の前半期大形墳の存在を県主制とのからみでとらえようとする考え方もある。

三十四、高堀・吉岡両氏は石棺の分布から統治圏の拡張を五世紀中葉以降に求めている。高堀勝喜・吉岡康暢「古墳分布の拡大と発展」『日本の考古学Ⅳ北陸』河出書房新社 一九六六